

音楽療法 症状進行を緩和

音楽の力によって症状の進行を緩和したり、リハビリの効果を高める「音楽療法」がある。専門知識を持つ音楽療法士が医師の指導や医学的知見に基づいて実施する点が、一般的なレクリエーションとは異なる。全国でも珍しい専門部署として2013年に設置された洛和会京都音楽療法研究センター（京都市山科区）の取り組みを取材した。（鈴木雅人）

パーキンソン症患者 訪問事業

生演奏で五感刺激

洛和会京都研究センター ■■



音楽療法士に導かれてピアノの鍵盤に指を乗せる患者（長岡京市）

アコーディオンやフルートの生演奏が、高島晶子さん（75）と長岡京市うぐいす台IIの自宅の一室で奏でられた。晶子さんは言葉を発することはできないが、ピアノの伴奏とともに童謡が歌われると、わずかに口を動かす。ゆったりとしたメロディーに合わせ、音楽療法士の柴田恵美さん（35）が晶子さんの腕に、とんとんと触れ、車いすを揺らした。

同センターが昨春から実施している患者宅の訪問事業に同行した。晶子さんは手足のしびれや筋肉が硬くなるなど、パーキンソン病と似た症状の現れる「パーキンソン症候群」を患っている。パーキンソン病には音楽によるリズムの刺激が特に有効という。発症は、手の震えを訴えたのが始まりで、脳の萎縮が確認された。症状は緩やかに進行するといいい、今年に入ると自ら立つこともできなくなった。夫の徳行さん（80）は「音楽で五感が刺激され、脳が活性化するのはないか。完治は難しくても、できることはしてあげたい」と話した。

患者の呼吸の速度に合わせて、テンポを落として演奏することもあるという。訪問事業は演目のジャンルも進行もすべて患者に沿った「オーダーメイド」だ。実感する場面があった。

ピアノの前に晶子さんを移動させた。このピアノは晶子さんの嫁入り道具で、以前はここで近所の子たちを指導したという。柴田さんは晶子さんの手をとり、縮こまり硬くなった肘関節を少しずつほぐした。やがて指が鍵盤に届き、「ボン」と音を響かせた。晶子さんの顔に赤みが差し、症状特有のこわばった表情が緩んだ、ように見えた。

入院患者約20人が病院の広間に集まり、音楽とスタップの手ぶりに合わせ、車いす上から腕を上げたり、上半身をひねったりする。洛和会音羽リハビリテーション病院（京都市山科区）が音楽療法として週1回実施する、リハビリ用の「はびりすダンス」だ。

振り付けを担当した同病院の作業療法士、春田詩織さん（29）は「歌詞と音楽で動きのイメージを持ってもらい、体を大きく動かせるようにした」と話す。パーキンソン病患者が多く入院しており、動作が小さくなり、体が縮こまっていく傾向があるからだ。

歩行困難な重症度の高い人が多いため、上半身に重点を置くダンス制作に同センターの音楽療法士と取り掛かり、昨秋から患者向けに始めた。振り付けと同時に進行で歌詞を考え、医学的な効果をいかに

私も心が安らぎ、元気をもらっている」と徳行さんはいう。「いつも彼女に「訪問が待ち遠しいなあ」と話し掛けているんですよ」と語り、晶子さんに「上手にできたな」と優しく声を掛けた。

歌詞と振り付け

リハビリ意欲引き出す



はびりすダンスをする入院患者ら（京都市山科区・洛和会音羽リハビリテーション病院）

に高めるか、それぞれ専門の知見をすり合わせたという。

歌詞にある流水の「サクラ」のシンは大きく上に手を挙げ、体を伸ばすよう促す。「粉雪」で手首を振ったり、指を一つずつ折る動きも取り入れた。リズム感を失ってしまう症状に合わせて、同じメロディーであっても太鼓やシンバルと伴奏楽器を替え、リズムが明確に伝わるようにしており、病院のある山科の四季が思い浮かぶ歌詞にして親しみやすさも工夫した。

「はびりすダンスなること、ほかの療法では得られない楽しさが患者のリハビリ意欲も引き出しているという。担当者は「高齢者をはじめ、パーキンソン病や認知症といった神経変性疾患患者への効果を研究で明らかにし、音楽療法の医療分野での定着を目指したい」としている。